

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372700932		
法人名	社会福祉法人 成仁会		
事業所名	グループホーム みどり		
所在地	熊本県阿蘇郡西原村布田 845		
自己評価作成日	平成27年 11月 18日	評価結果市町村受理日	平成28年1月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php">http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成27年12月2日

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

広報誌「しあわせがいっぱい」は家族、地域に好評である。職員が入居者と楽しく生活する為の工夫と視点がある。喜びを共有することができる。職員は常に笑顔で入居者、家族とコミュニケーションがとれている。入居者全員に個別外出企画を実行している。相互交流が出来る。職員は役職、資格にとられず業務が出来、問題意識を持ち意見を述べる事ができる。入居者は退去後の不安感が解消できるように支援体制がある。新規入居にあたっては本人と家族と信頼関係が早期に出来るよう対応している。新しい入居者の受け入れをスムーズに行える様職員間で話し合いを行い実践している。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設時よりの地域への啓発(しあわせがいっぱいと称するホーム便り等)が行き届いたホームでは、日々の申し送りや毎月の会議等で話し合い、本人の望む生活の実現に向け、目標に“個別ケア”を掲げ、少ない職員体制の中で入居者の声を生かしながら“今できること”を支援している。(例:生まれそだった天草・個別買い物・外食の他、阿蘇へのドライブや時には「弁当もいいね」から弁当持参の飛行機見学等)、この1年職員や入居者の変動もある中で長年の入居でも大きな変化もなく過ごされる様子に、ケアの確かさや健康管理の賜物であると敬意を表したい。ホールリビング中心の生活の中でも、お茶会の開催等楽しみ事を組み入れ、残存機能を生かした生活に一層家庭観を深めている。定着を見せる運営推進会議は、入居者も発言できるという特徴もあり、この会議を活かしながら地域に開かれたホームとして今後の更なる展開に大いに期待したい。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

### 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ホーム内のケアにとどまらず、地域への貢献、信頼されるホーム作りを目指し、ガラス張りの運営を目標に実践している。	開設時からの理念である“人間としての尊厳と家庭的な雰囲気を入居者の個性を生かし、安心した暮らしをささえる”を継続し、管理者は毎月の会議の中で方向性を投げかけている。入居者個々の状況に沿った介護を進めることとして、毎月3～4名のモニタリングを行い、理念をプランに反映されるとしている。地域に密着したホームであることは、“みどり便り”の村内全戸配布や“しあわせがいっぱい”と称するホーム便りの地区回覧の継続に表れている。	平成14年開設という経年は、入居者・家族・地域のニーズ等の変化もあろうかと思われる。地域密着型事業所として地域に根ざす姿勢等を考慮し、全員で理念について見直されることを期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	通年を通し行事、回覧板等の交流をもつようにしている。地区行事に出かけることにより、人と人とのつながりが途絶えないようにしている。	自治会に加入し、地域行事(どんどや等)参加や、回覧板のやり取り等地域の一員として活動している。老人会運動会、近くにある会社の運動会等入居者の活躍の場があり、併設の特別養護老人ホームで開催する秋祭りには保育園や小学校からの参加もあり、地域住民と接する機会が作られている。	これまで在宅時に行っていたサロンへの参加をきっかけとして、入居者個々の地区に出かけ、社会性を保ちたいと意欲的である。この事例が、更に認知症ケア啓発の一環となることを大いに期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議、家族会、毎月発行の新聞等で、情報を発信している。また、GHを実際に見学してもらい理解してもらえるようにPRをしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	出来るだけ具体案や方法がでてくるようにしている。また、内容を職員や家族会で報告するようにし意見を汲みとれるようにしている。民生委員さんからの情報は地域へ出ていくきっかけとなっている。	今年度は事前に議題を提示して定期的開催している。行事・入退居報告や介護保険改定等の情報発信の場、及び入居者の要望等が発言できる場としており、入居者の意見がサービス向上に活かされている。入居者が在宅時に参加されていた地区のサロンに参加できないかを行政に相談し、参加が可能となる等有意義な会議である。	家族には毎回参加を案内されているが、参加は難しい状況にあり、今後も継続して案内していただきたい。また、出された意見や提案事項の進捗状況を説明されることで、更に意見等も多くなるものと思われる。今回の評価結果についてもこの会議の中で検討されることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	困難事例等の受け皿として村内の社会資源となるよう、日頃より相談等相互にしやすい関係づくりに努めている。	村役場と在宅生活困難事例を検討したり、地域包括支援センターの運営推進協議会の一員として村全体の状況を把握している。また、福祉避難所として協定を結んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関の電子ロックは、時間帯については、職員が一人になる21時～翌7時までにはしている。ただし状況に応じて必要な際は都度検討している。	法人全体での身体拘束廃止委員会で周知を図り、ホーム内での勉強会には「だめ」等事例を通して指導している。車いすも移動に使用するものと捉えているが、立ち上がり厳しくなり1名だけ使用している。玄関の電子ロックを設置し、職員の勤務体制や時間的なロックを行うこともある。入居者の帰宅願望や外出傾向に見守りの徹底や早めに察知し、母体へ食材の受け取りに出かける等機敏転換を図ることで、拘束の無いケアとしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	内部牽引体制お互い注意し合える職場風土作りに努めている。スタッフ、ミーティングを開催している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	一事例に権利擁護については現在利用はありません。法人の職員会議や勉強会において研修を企画予定		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前の説明はもちろんの事、退居にあたっては、不安がないよう十分な説明と今後の対応について説明するようにしている。また、利用改善等の際も十分な理解が得られるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議、家族会、職員と家族のみで行う懇親会等で、話を聴ける機会を作っている。また、ケアプラン説明の際にしっかり意向を聞くようにしている。	入居者は運営推進会議に輪番での参加により、要望等は発信されており、ケアサービスに反映させている。家族会や家族と職員との親睦会及び花見は入居者・家族と職員とのコミュニケーションの場として大々的に開催している。また、訪問時(プランの説明等)に意見や要望を聞き取りしているが、「入居者が安心して暮らせればよい」との言葉が多く、要望等は無い。また、この1年苦情・相談もないが、毎月の会議の中で家族の声を共有し、必要案件は記録し、管理者へ相談し解決する体制としている。	家族からの信頼や安心という声が多く寄せられている。意見や苦情も無いホームであり、更に忌憚の無い意見や要望を聞き取ることも必要であろうと思われる。ホーム独自のアンケート調査等意見や要望を引き出す工夫に期待したい。また、新人職員は便りと広報誌の中で紹介されているが、ホーム内にも職員紹介として掲示する等検討いただき、顔の見えるケアや会話のツールとして生かされるよう期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ミーティングを通し話を聴く機会がある。また、意見や提案が上がりやすい様日頃よりコミュニケーションをとっている。	毎月のホーム会議の中で、職員の意見や入居者個々の状況を話し合い、管理者と主任とで職員の休みを減らさないための対策を協議している。また、管理者は頻りにホームに足を向け、職員の表情を把握し、要望等を聞き取りしている。施設長は人材確保の重要性を認識し、今いる職員にも研修への参加を推奨している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人全体に人事評価があり本人と上司が評価する仕組みがある。残業を減らす有給取得に努めている。資格取得できるよう各自、目標設定している。。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所内の勉強会の他、法人全体で勉強会を実施。外部研修の機会がある時には、研修扱いとし、順次職員を出せるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県、阿蘇ブロック会を通して、連絡、勉強会等の交流を図っている。その中で、事業所間の相互学習や訪問の機会を作るようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居までには、必ず数回の面接を行い、本人の意見や思いを聞きだせるよう努めている。又、初期ケアプランにも反映できるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居に至るまでに行う面接の中で家族の意見も十分参考にしている。アセスメント作成には家族にも手伝って頂き必要なものは初期プランにも反映出来るようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	管理者と企画作成担当者が一緒に面談を行い現状の確認とその時の一番必要な支援を提案出来るようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家庭的な雰囲気の中で、共に暮らし支えあう関係を心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人を中心に、家族、職員が両輪となるよう、ケアプランの中に家族も役割、支援していただけるよう盛り込んでいる。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域へ出かけていくことにより、人、場所との絆が途絶えないようにしている。	地区のサロン参加、以前住んでいた場所、地元での買い物等これまで過ごしてきた地域の中で、人、場所との関係性を継続させている。また、村民運動会・近くの企業の運動会等に参加し住民との交流としたり、阿蘇神社への参拝等を継続して支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の場の雰囲気作りには努めているが、全て職員が介入するのではなく入居者にできる力があれば、利用者同士の支えあいを見守ることもある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	以前入居されていた入居者の訪問がある。併設の特養に異動された場合ケアプランを含めた情報の提供を行っている。交流を継続する為、行事、サークルは、合同で実施している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	今年の事業計画に「個別ケア」を目標にかけ、実践している。	入居者との会話の中から、思いを把握し個別に外出する等入居者個々の違いや生活歴の違いを把握し、目標とする個別ケアを実践している。誕生日前後に実家への帰省や買い物に出たい等の要望に応じている。「おいしいものを食べたい・いつも山に行っていた」等を思いや意向として捉え支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居の際は本人や家族、施設担当者から情報を得るようにし、アセスメント用紙を活用することでより深い情報を把握することができるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人の有する能力等の現状はアセスメントを使って把握するようにし、ケアカンファレンスや申し送りノートを活用し、職員間の相互理解に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	三ヶ月に一回のモニタリングの他、六ヶ月に一回のケアカンファレンスで職員間の意見を集約。半年に一度は家族、本人も交えカンファレンスチームとしての意見がケアプランに反映できるようにしている。	毎月のカンファレンスの中で話し合い、ケア方向性や統一を徹底している。アセスメント及びモニタリングをもとに検討し、半年間毎に作り直している。体調変化により食事形態の変更はあるものの大きな変更はなく、高齢化した中にも役割を持つことで生きがいを感じる日常など個別性のあるプランが作成されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録や申し送りノート、ケアカンファレンスの活用により情報の共有に努めている。また、モニタリング、ミーティングを活用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご家族の面会やサービス担当者会議などを通して、意見や要望を取り入れている。又、外部評価アンケートを参考にしている。新規サービスが必要になった場合、法人全体で検討するしくみがある。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	法人内の人的、物的、環境面の資源については広く活用、協働できている。現状の地域、社会資源のみでなく、新しい情報をチェックできるようにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の希望等、必要性があれば以前からのかかりつけ医の受診を支援している。又、協力医療機関との連絡を密にし、適時、適切な医療を受けられるよう支援している。	これまでのかかりつけ医を支援しているが、現在は往診可能な協力医療機関(歯科も)をかかりつけ医とし、定期的な診察が行われている。他科については可能な限り職員の付き添いや、家族にも入居者の状態を共有してもらうため同行を依頼している。医師にはバイタルチェックなどの記録を提供し、スムーズな診察に繋げ、入居者の表情や動きなど気になることがあれば、医師や家族と現状を共有し適切な医療を支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	定期的に行われる回診時には現状を伝え法人内の看護師と連携できるようにしている。状況変化時は早急に報告し受診の有無の指示を受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時はサマリーを使用し、本人の認知面や行動状況について申し送りを徹底している。入院中も面会を多くし、本人の不安を減らすと共に、病院のスタッフと関係作りができるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入院時、カンファレンスの際に家族に対し、急変事の延命処置、看取りについても聞き取りをおこなっている。	終末期支援のグループホームでの対応は難しく、ホームでの入浴支援が可能なまでを目安として出来る支援に努めている。家族はギリギリまでをホームで過ごし、その後特養への住み替えや、病状によっては医療機関などを希望されている。また、緊急搬送については家族に確認をとっている。現在はホームでの入浴可能な段階までを一つの目安としているが、家族の希望も聞き取りながら今後の課題としている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変事のマニュアルを作成し、特養との連携で急変事に備えている。又、年一回担当消防署から来てもらい救急蘇生法の訓練を実施している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防火管理者を配置し、火災や災害時の避難経路などの確保と、防火点検、隣接特養と合同で年2回の防火訓練とスタッフが自主的に行う防火訓練を行っている。	隣接の本体施設と合同で火災訓練や自主訓練を実施している。また、消防訓練前には業者点検も行われている。自然災害の対応については、昨年阿蘇山の噴火から防災マニュアルを策定していることや災害発生時の緊急対応、防災計画、マニュアルチェックなど危機管理についてホームだよりで報告を行っている。また、隣接施設には地元消防団に在籍している職員もあり、年末夜警なども行われている。	本体施設は地域の福祉避難所(通常備蓄もあり)となっており、地元消防団にもホームの現状確認と有事の際の協力を依頼している。今後も地域との連携強化により、入居者の安全確保に努めていきたい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシー保護の為、排泄時、入浴時など一人ずつケアを行っている。又、声掛けも耳元で行っている。	全職員が現状を受け止めながら理念を共有し、尊厳と家庭的な雰囲気の中で個性を活かした日常生活の支援に努めている。個人情報については本人・家族の了承を得ており、職員の守秘義務についても徹底されている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	週に二度ある自主メニューで食べたい物の希望に添えるように作っている。又、入居者の方にも調理に参加していただいている。衣類の選択も可能な限り本人にしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者になにか希望がある時は、話を聞いて対応を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご家族に協力頂き本人の好む服を準備頂き本人の希望を聞きながら着て頂いている。ほぼ毎日洗濯し清潔に心掛けている。起床後や入浴後、居室洗面台にて整容されている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	新入居者の意欲的な意見を取り入れた献立を取り入れている。出来る作業は、コミュニケーションをとりながら楽しく調理できるように支援している。	食材を本体施設に入居者と一緒に受け取りに行き、職員が献立をアレンジするなど工夫しながら料理を提供している。手際よく茶碗洗い・拭きをされる方、庭先の梅を収穫して梅干作りなど入居者が楽しみながらできる事が支援されている。また、職員によるお茶会やドライブ外食なども聞き取りや記録物から確認された。入居者同士で食の進み具合を気にかけるなど、職員と一緒に和やかな食事の光景であった。	本体から届く食材が行事食やイベント食の場合もあり、職員は栄養部からの情報を周知しておくことで、入居者との会話にも繋がると思われる。以前実施されていた自由メニューの日を、人員配置が整い次第取り組まれ、今後も入居者と一緒に楽しい食への関わりを持っていただきたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	本人の状態に合わせて水分量不足気味なときは、チェックをし必要分摂取していただいている。又、本人の嗜好を大切に、お祝いや行事、普通の食事のメニューに聞き取りをし、取り入れている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケア、義歯洗浄を行い口腔清潔に努めている。可能な限り自力にて行っている。舌磨きも行っている。必要時、歯科と連携している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の排泄パターンに合わせ、排泄チェック表を活用しながら、本人にあった方法で支援している。オムツ類に頼らず、普通の下着を使ってもらおうようにしている。	日中はできるだけ布下着を使用しトイレでの排泄に努めている。夜間はポータブルトイレやリハビリパンツ、大きめの尿とり使用など、個々に応じた最良の支援を共有している。入居者は2箇所あるトイレで居室の近くなど使い慣れた場所を使用しており、職員は気持ちよく使えるよう臭気や汚れ等が無いよう清潔に管理している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	下剤・坐薬に頼らず、乳製品、運動等で対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	グループホームでは、一人ひとりがいつでも入浴できるよう、体制を整えている。個々の気持ちを第1にくつろいだ気分で入浴して頂いている。又季節事に思考し入浴して頂いている	入浴を誘う際「入りましょうか～！」の声かけを嫌がられる方もあり、職員は「今日はお風呂どうしましょうか～！」など、一人ひとりに応じた誘いを工夫している。毎日入る方、1日おきの方など希望も確認しながら対応可能な時間で支援している。また、菖蒲や柚子湯、時には入浴剤を使用しながら、深めの浴槽であり安全面にも配慮しながら楽しい入浴支援に努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	睡眠の際は清潔な寝具を使っただけのよう定期的に洗濯、交換したものを使用。日中ソファアなどを活用し、リラックスできる環境づくりを心がけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	カルテに記入してある「くすりの説明書」をスタッフは必ず読んで内服薬を把握。一日分ずつセットし、毎食時、眠前と確認し、確実に内服行っている。内服に変更あれば記録し、申し送る。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの意思を尊重、又、能力に合わせ、茶碗洗いや、洗濯物たたみなど、ケアプランと連動し行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節感を味わえる行事、ドライブへの外出は実施している。又、地域のイベント事へも参加している。本人の希望を叶える為、遠出も実施できるようにしている。	限られた方であるが本体施設へ食材の受け取りやゴミ出しを継続して支援している。また、天草へ魚料理を食べに出かけたり、阿蘇神社参拝と外食、弁当を持って飛行機の発着を見に行くなどドライブと食事を兼ねた外出は好評である。誕生祝いとして職員と外食や敷地内の散歩など個別支援の他、家族による美容室支援やホテルでの花見会では家族と一緒に楽しいひと時を過ごされている。	外出支援の様子は広報誌の中でも紹介されており、入居者が楽しい時間を持たれていることが確認された。今後も、職員体制により、入居者の希望も取り入れながら出来るよう外出支援に努めていただきたい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人の金銭所持が理想だが現状は難しく実践できていない。買い物等の際に支払いを一緒にすることなどで実感してもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の要望がある場合は、家族へ連絡を入れ、本人が家族と直接話を出来るよう支援している。又年賀状等、親しい人とのやり取り出来るよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	常に環境整備に努め、清潔感のある利用者がくつろげる空間になるよう工夫している。季節の花や道具を使い、季節感が出るようにしている。	玄関のプランターに植えられた花苗、リビングホールの飾り物、広報誌の掲示などからも季節を感じることができる。ソファや食卓は入居者の状態に応じて、安全面も考慮しながら見直しが行われている。また、調理の音や匂いを楽しみながらテレビを見たり、入居者同士での会話、新聞を広げる方などゆっくり寛げる空間が設けられている。ホーム内の床は業者によるファックス掛けが行われ開設から13年を得ても艶が保たれている。	今後は、脱衣所や洗面台など安全面にも配慮した収納に努めることで、更にスッキリとした空間になっていくと思われる。取り組みに期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間には、間隔をあけてソファを設置し、気の合う仲間と思い思いの場所できつろがれている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族と相談の上で、本人の使い慣れた物を活かし、馴染みのある居心地の良い環境を心がけている。	馴染みの品や安心される物あれば、スペースが許す範囲で持ち込んで欲しい事を伝えている。家具や茶器セット・小物をはじめ、特に家族の写真は安心感となっている。また、テレビを持ち込まれている方もおられるが、現在は他の入居者と一緒にホールでの視聴を楽しまれている。職員は一人ひとりが安心して過ごせる居室環境に努めており、入居者同士で部屋を訪問し合うなど、ご近所さんを思わせるような光景であった。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの身体機能に合わせた福祉用具を活用し、危険防止に努め、自分の力を生かし安全に生活できるように工夫している。		